

平成 29 年 6 月吉日

高校生よ

君たちは何のために生きていくのか？

(平成 26 年 5 月、静岡県内の高校で開講した都留文科大学出前講座の要約編)



都留文科大学特任教授

NPO法人グラウンドワーク三島専務理事

渡辺 豊博

目 次

第1章

- 1 大学は多様性にあふれた「人生の道場」だ
- 2 これからの生き方について考える
- 3 目標を定め一歩ずつ階段を登って行く生き方とは
- 4 人生、迷い、考え、悩んでばかりいられない
- 5 現場には人の生き方を学ぶ「知恵」がある
- 6 大学は人としての生き方を真剣に考える「人生の道場」だ
- 7 外国を体験することは人を「成長」させる
- 8 海外は「油断大敵」
- 9 日本人よ、富士山に「誇り」を持って生きよ

第2章

- 1 公務員試験は耐えないと春は遠のく
- 2 将来を見据えて愚直に勉強する
- 3 人生の選択権と判断は自分にある
- 4 自分の進路は自分で決め、自己責任で生きて行く
- 5 自分の人生は自分自身で演出する

第3章

- 1 君は日の当たる道を目指したいのか
- 2 君は自分に正直な道を目指したいのか
- 3 大学ばかりが人生ではない
- 4 農業には自然との共生の知恵がある
- 5 台湾では何故日本人が尊敬されるのか
- 6 自分の故郷には可能性と未来がある
- 7 資格をとることは人生の武器を持つことだ
- 8 どこにいても新たな試みに挑戦する
- 9 自分に正直な生き方は疲れない
- 10 いやだと思ったらやめる
- 11 自分の道は自分で探す
- 12 高いところに登ると自分がよく見える
- 13 強い信念と哲学を持って生きていく
- 14 被害者意識では社会は変わらない

第1章

1 大学は多様性にあふれた「人生の道場」だ

私の誕生日は、1950年5月28日ですから、今年で64歳になります。皆さんに比べればかなりの年寄りですが、逆に、それだけ人生のいろいろを経験してきました。その「波乱万丈」の経験知と人生のあれこれなど都留文科大学の説明を含めて、私なりの考え方をお話しします。

私の現在の職業は、都留文科大学文学部社会学科教授です。昨年、この高校を卒業した皆さんの先輩も、私の「出前授業」を聞いている方がいます。また、皆さんが、2年生、3年生ということなので、もしかしたら、今年、都留文科大学を受験していただき見事に合格した暁には、大学で、私の「毒舌」「臨場感」にあふれた「富士山学」や「地域環境計画」に関わる多様な「講義」を聞かなきゃいけないということになるかもしれません。

都留文科大学は、山梨県都留市にある全校生徒3000人規模の大学です。全国各地から学生が集まり、静岡県出身者は山梨県に次いで2番目です。今までに全国各地に多くの教師や公務員、企業人を輩出しています。真面目な学生が多く、現場・フィールドを重視する現場主義的な雰囲気を持った、大変、魅力的な大学だと思います。本学での現場体験やグローバルな経験を通して、現実社会での実践力や現場力、国際性などを学べる、「人生の道場」ともいえます。皆さんが、私が在職している都留文科大学に、是非とも、入学していただくことを強く期待しています。

2 これからの生き方について考える

さて、私の講義後、グループ別に分かれて話し合い、発表していただく内容は、「これからの人生の方向性とは何か、何を精神的な柱・基盤として生きていったらいいのか、社会の中で自分はどんな役割を担うことができるのか、今後社会の中で生きていくにはどんな資質やキャリア、専門性を身につけたらいいのか」などについて話し合ってもらいます。この話し合いを切っ掛けとして、自分の生き方や方向性を見つけ出していきたいと思います。

当然、都留文科大学だけが大学ではありません。さらに無理して大学に行く必要もないと考えています。人生、色んなスタイルの生き方があり、いろいろな場所で自分を鍛え、発揮することができます。大学は、専門的な知識の習得と資質の研鑽を行うための一つの「人生の道場」だと思います。そういう意味でも、これからの人生の方向性、自分として何をやりたいのかの意思や羅針盤、行き先、生き方などをしっかりと定めておく必要があります。

3 目標を決め一歩ずつ階段を登って行く生き方とは

私は、今まで、被災地に何十回も行っています。今、被災者が一番苦しいと思うことは何かというと「自分の将来やふるさとの将来、子どもたちの将来がどうなるのか、その目標・ゴールが見えない」ことです。「いつになったら今までの生活を取り戻すことができるのか、いつになったら福島を離れた関係者が福島に戻って来てくれるのか、地域がいつ解放され自分の家屋敷が自分のところに戻ってくるのか」など、全く先が見えない未確定の問題が山積みです。人は先が見

えずに生きていくことが一番苦しいことです。頑張っ、頑張っ、生きて行くんですが、一体いつまで頑張ればいいんだということになってしまい精神的に疲れ果ててしまいます。

皆さんがより強く生きていくという意味では、自分なりの「ゴール」を設定して、そこまで到達したら、また新しい「ゴール」を作って行くという生き方、階段を一步一步着実に登っていくような人生の生き方が、もしかしたら一番楽というのは変ですが、着実にキャリアを蓄積している生き方ではないかと思います。

4 人生、迷い、考え、悩んでばかりいられない

急に真面目な話になりますが、「皆さんは、一体、何のために生きていますか」という質問をしてみたいと思います。

前列の君、「人は何のために生きていますか」と思いませんか？

男子生徒／生きています理由ですか？

渡辺／そうです。何でもいいよ。正解はないから。

男子生徒／…

渡辺／特にない？

男子生徒／生きています理由ですか？

渡辺／生きていないの、今。息、吸っているでしょう。だから素朴な疑問じゃない。なんで生きていますのですか？…俺の質問、難し過ぎますか？生きています人の前で何で生きていますのって、おかしい質問ですか？気軽に教えてください。AKBの前列目に入るためとか…困ったなあ。隣の人に聞いてみましょう、何のため？

男子生徒B／理由ですか？ たまたま生れて来たからです。

渡辺／いい答えだね。たまたまね。そうだよ、生まれて来たから生きていくしかない。でも、そんな生き方、疲れませんか？そういう生き方って、迷走しているような気がするんだけど本当ですか。何かスポーツやっていますか？

男子生徒B／今はやっていません。

渡辺／何となく生きています？素晴らしいですね。

じゃあこっちの列に行こうかな。俺の前に座ったことがあなた方の運命です。申し訳ないけど、質問はここ3列まで行くからね。覚悟しておいて。じゃあ、あなた、何のために大学に行くの？

男子生徒C／大学？色んなことを学びたいから。

渡辺／学びたい？それは本音ですか？

男子生徒C／本音です。

渡辺／特に、どういうことを学びたいの？

男子生徒C／英語を学びたいです。

渡辺／英語？

男子生徒C／そうです。英語です。

渡辺／おお、いいですね、学んでどうするの？

男子生徒C / いやー、学んで、うーん、就職する。

渡辺 / 学んだからといって就職できるとは限らないよ。どうします？

男子生徒C / 頑張ります。

渡辺 / 何を頑張るの？

男子生徒C / えー！

渡辺 / ごめんなさいね。いじめているわけじゃないから。でも、いじめているの。というわけで、こういう面接の仕方を何ていうのか知っていますか？「圧迫面接」って言うんです。人の言葉の言葉尻を捉えてグイグイと、いじくりまわしていくんです。そんなことで、いきなり、「何のために生きるの、大学に行くの、勉強するの、就職するの」と質問されて明確な回答ができる高校生はあまりいないと思います。しかし、特に、3年生は人生の方向性をはっきりさせなくてはならない時期だと思います。迷って、考えて、悩んでばかりいられない時期でもあります。

5 現場には人の生き方を学ぶ「知恵」がある

大学に入って、色々と勉強して卒業し、就職できたからと言って、それだけで人生の将来が幸せでバラ色になるほど、人生って甘いものなのかなと思うんです。

私は、都留文科大学の教授になって7年目です。その前は58歳まで静岡県庁で働いていました。県庁は複雑怪奇な組織であり、人間的な関係も難しく神経を使う職場でしたが、35年間も続けられました。県民の皆さんの公益的仕事をこなすために頑張ってきたつもりですが、「公務員の世界」と「大学の世界」とはもちろん組織の体質も違い、いろいろな苦労もあります。

皆さんのような若い人たちが、厳しい社会の中で頑張って強く生きていただきたいという思いで、私に関わってくる富士山や三島の活動現場を、学生にフィールド体験の現場として開放し、「現場で自分を磨いていただきたい、自分を発見していただきたい、そして自分に何が足りないのかを考え気づいていただきたい」という思いで、フィールド体験のプログラムを用意しています。私一人でやってきているわけではないのですが、たくさんのボランティアの皆さんのご支援を受けて、体験型の授業をやっています。

ゼミ生は一般的には、2年後半からゼミに入りますが、毎年、延べ100人近い学生が、都留市から三島市の現場に来て、現場で汗を流し、実践活動を体験しています。現場での実践を通して、また、多くの地域住民やボランティアの皆さまとの会話・交流を通して、「人生とは何か、自分に合った人生の生き方とは何か、自分として社会的な役割を果たしていくにはどんな資質や専門性が必要とされるのか」など、自分の人生を考える機会、「生きた大学」として活用しています。

私のゼミ生や教えている学生たちを見ていて思うんですが、人生の生き方が弱いというか、甘いという気がしてしょうがないんです。大学生だから迷っていて当たり前ということは、当然ありますが、どうして就職先が決まらないのか、すなわち自分の特性や人生の方向性が不明確なのです。

私は、公務員出身者であることから、公務員を志望する学生の就職のお世話をしています。しかし、実感としては、学生たちの公務員志望の動機が非常に「曖昧」なのです。例えば「学校の

先生になりたいとか、公務員になりたいとか、公務員が難しいから企業に入りたい」と言ってきました。こんな考え方の学生に対して、「人生を甘く考えているよ、自分の人生だから真剣に物事を考え対応してください」と助言しています。4年生ですが、一体、4年間の大学時代を、「どのような問題意識をもって生きてきたんだ、今後どう生きていくんだ」と思いませんか。

6 大学は人としての生き方を真剣に考える「人生の道場」だ

皆さんが、今の時点で、自分としての人生の方向性、大学を卒業後に何をを目指すなどの生き方について、明確な問題意識を持つことは難しいと思います。しかし、大学を目指す高校時代においては、是非とも、意識を大学卒業の時点まで見据えていただき、長期的な視点で、これからの人生をしつかりと考えていくことが必要だと思います。できましたら、30歳ぐらいまでの自分の人生をどのようにしたらいいのかを、ぼんやりでもいいので考えてもらいたいです。その上で、今、何をなすべきか、まずは何をしなければならないかを明確にしていきたいのです。

今後、2年か1年先に、皆さんのほとんどは間違いなく大学に行かれるものと思います。しかし、大学での4年間を、一部の方はこれからの5年間を、何をしたらいいのか、そして、どういう職場に就職し、そこで一体何をなすべきなのかを、いわゆる個人としての社会的な役割を、どのように果たして生活を支えていくのかについて、しっかりと考えてもらいたいです。

7 海外を体験することは人を「成長」させる

私は、今から42年前に、東京農工大学農学部農業生産工学科を卒業しました。4年生の夏休みを過ぎた頃までは、卒業論文の作成・とりまとめに懸命に取り組みました。私はダムの漏水のことを研究していましたが、友だちと2人で卒業論文を仕上げました。作成には相当の苦労と時間がかかりました。私は表紙と目次だけを作り、論文の中身については、立派なものが結果的には完成しましたが、ほとんど友だちが作成してくれました。頼るべきは良き友の存在です。

友だちの理解と後押しを受け、無謀といえる人生の勝負・冒険に挑戦しました。9月中旬、横浜港から船に乗りロシアのナホトカに行き、シベリア鉄道でシベリア大陸を横断し、ヨーロッパ各地を横断し、アフリカ大陸を縦断し、イスラエルの方からインド半島を縦断し、ラオス国境まで行き、それからタイを縦断して、マレーシアに行き、ジャワ島を横断し、香港、韓国などを、約半年近く、世界を放浪してきました。私はその旅を通して、「人とつながりの大切さや人間的な信頼関係をつくるためには言語はあまり関係ないこと、人としてどんな場所でも生きていける自信と潜在力」を学び、発見しました。

インドで学生たちと仲良くなりましたが、気がついたら、私のリュックサックが見事に盗まれました。香港ではヤクザに囲まれ、キラッと光るドスを目の前で振り回され殺されると思いました。しかし、結構、図々しく、気がついたら、そのドスを取り上げ足で折っていました。自分って凄く度胸があることや自分の強さを実感・見直しました。香港のヤクザと戦って撃退する力を内在しているのですから。切迫した場面での興奮度や迫力・集中力を自分自身の意識や行動の中に潜在的に内在している自分の可能性を、この恐怖体験を通して再認識しました。

「人の懐に入る」という言葉を知っていますか。その人と人間的に親しくなることです。そして、信頼・信用されるということです。そのためには、どのような方法や意思により、多様な人々と接したらいいのでしょうか。そのような危機な体験を含めて、幸せな時間を過ごす中で、その「心得」「ポイント」というものを、海外での放浪の旅で学び、発見しました。

特に、この放浪の旅を通して大切なことだと実感したものは、「他人への思いやりの心やコミュニケーションの力」など、人間としての基本的な知識と心根の重要性です。大学の勉強は、教室内での座学が多いのですが、学問の基礎・基本を学ぶことは大事なことであり、人生の「基盤」といえます。確かに海外に旅行したり、海外で仕事や勉強をするためには、英語を中心に、読み、書き、伝え、理解できる資質と専門性を磨かなくてはなりません。

そして、その情報や意思、考え方を的確に人に伝えられなくてはなりません。また、人が何を言いたいのかを理解できなければなりません。それらの能力は「読解力」であり、「解釈力」でもあります。そのような能力を大学で身につけるのです。

さらに、皆さんは、数学、理科、生物、物理、世界史、日本史、倫理など、高校時代に学んだ基本的な知識は、受験のための知識であり、大人になったらあまり役に立たないと誤解している人がいるかもしれません。しかし、現実的には、あまり実感・現実味はないと思いますが、仕事上や個人的に間違いなく必要とされる重要な基礎知識であり、より発展的な仕事を成していくためにも必要とされる必要不可欠な知識といえます。

こんな「いい加減」に生きてきた私ですが、大学時代の後半は、懸命に勉強しました。しかし正直、それらのほとんどを忘れてしまっています。英語も懸命に勉強しましたが、今では、ほとんど忘れてしまいました。しかし不思議なことに、私はイギリスに50回ほど行っていますが、夜になると英語力はさえまくり、「準1級」の会話能力を超えていると思います。何をいいたいのかということと言語の得意不得意は、海外での意思疎通にはあまり重要なことではないということです。人間同士の思いが言語の障害を越えて心と心がつながることができるということです。

国内を含めて、海外を自由に旅すること、体験することは、人を強くし、多くの刺激の中で人を成長させます。

8 海外は「油断大敵」

私は世界を放浪した時に、外国人の気持ちを引きつける「道具」として、富士山の写真を持っていきました。葉書ぐらいの大きさのものから自分が撮った小さいものまで100枚ぐらいを束にして持っていきました。マレーシアからタイを通り、シンガポールに出てジャワ島を横断する鉄道は二千数百キロもあるのですが、お金がないから料金の最も安い4等車に乗りました。座る場所が板で、豚とか鶏が車内を飛び回っている車両で、ジャングルの中を走って行くわけです。熱風が窓から強烈に入り込んで来ます。あの南国の香りが、今も淡く記憶に残っています。

当然、長旅ですから大きな荷物を背負っています。一人旅ですから、荷物を置いてトイレに行ったり、食事に行ったりしなくてははいけません。正直、人との信頼関係ができていなかったら、私が留守した瞬間に、その荷物は盗まれてなくなってしまいます。海外は危険で安易な油断はできま

せん。右側に置いたと思ったらもうない。前に置いてもない。油断大敵です。

一番気をつけていただきたいのは、写真撮影の時です。イギリスのバッキンガム宮殿に行くとき英国紳士風の怪しいおじさんが、目の前に突然現れます。そして「ワタシ、日本語、チョットダケ デキマス。写真、撮リマスヨ」と言って、大体一眼レフの良いカメラを持っている人のところへ来るんです。写真を撮ろうとしていた人が、「ありがとうございます」と言ってカメラをその紳士に渡すと、「イヤー、バッキンガム宮殿ハネエ、コノ道路ヲ渡ッテ、ムコウ側カラ撮ルト、良ク写レマス」とか言って、「カメラを貸シテ、携帯モ貸シテ」みたいに言って、カメラと携帯を受け取るとそれを持って道路を渡り、写真を撮ると、「サヨナラ」と言って、カメラも携帯も全部、持っていかれます。盗られちゃいますから、気をつけて下さい。

9 日本人よ、富士山に「誇り」を持って生きよ

そんなことで、海外に行くとき危険なことに遭遇します。しかし、私は、何となく怪しそうな現地の人たちと友達になっちゃうことができます。その方法として「富士山ネタ」が有効です。

インドネシアに行った時、マレーシアから下がってくる鉄道の中で知り合った人に富士山の写真を見せ「マウント富士」と言わなかった人には会っていません、富士山は世界で一番有名です。

それが、インドネシアの夜行列車の中の話ですが、前に座った英語が喋れるはずがない現地の人に、富士山の写真を見せると、「おっ、マウント富士、素晴らしい」「おまえも富士山が好きな感じで友だちになろう」と言ってきました。それからは「インドネシアにはこんな山があって、こんなになっていて、こうやって、最近爆発した」みたいな話になってきて、「ビール持って来てやるからどんどん飲みなさい」みたいに会話が弾みます。

皆さんは、富士山が身近にあることに「誇り」を持って下さい。私は、ニュージーランドに今までに3回行ってきます。ある時、オークランドの小学校で富士山についての講演をしたことがあります。その時に、小学校4年生の子どもたちに「日本を知っていますか」と質問しました。どのぐらいの人が知っているかと思いましたが、なんと70%の子どものみしか日本を知っていなかったのです。三島市や静岡県は、当然、誰も知りません。

しかし、富士山のことについては、ニュージーランドの小学4年生が、全員、知っていました。驚くべき結果だと思いませんか。富士山は、国際的には「日本の富士山」ではなく、「世界の富士山」になっていることを実感しました。皆さんは、富士山を毎日見られる贅沢な場所・環境に住んでいます。富士山の裾野の好条件・好位置にある、この学校に誇りをもって下さい。この学校には、現実的には結構、「埃」も積もっていると思いますが、綺麗に拭いて、この学校の富士山を尊ぶ校風に「誇り」をもって勉学に励んでください。当然、富士山に「誇り」を持って人生を生きていってください。

第2章

「人は何のために生きているのか」さらに、「何のため勉強するのか」の話に戻します。実は、私も高校時代や大学時代、「自分が何のために生きていくのか、勉強するのか」について、随分、考え、悩みました。例えば、勉強するということは、どんな意味や意義があるのでしょうか。

私は、高校時代に勉強をする意味や意義を、明確に見出すことができませんでした。しかし、試験や就職などでは、とりあえず、目先の障害を越えなければならないので頑張って取り組んできました。頑張らなくてはならない時や人生の次なる進路・生き方を決める時には、雑念や迷いを振り払い、気持ちを集中して、とりあえず目先の課題に懸命に挑戦し、難題を乗り越え、克服してきました。だから、人生とは課題への挑戦の「連続系」「経験知」の蓄積といえるかもしれません。困難を乗り越えた先に、何かの希望や次なる方向性が発見できるという仕組みなのかもしれません。嫌でも山に登らなくては、その先が見えません。

1 公務員試験は耐えないと春は遠のく

大学受験の話をする前に、大学生が「公務員試験」を受けるときの話をします。実は昨日、授業が終わってから公務員を受けたいという学生が研究室に相談に来ました。よく話を聞いてみると、「面接カードをどうやって書いたらいいのか、公務員試験での面接に対してどのように望めばいいのか、公務員になるためにはどのような資質を身につければいいのか」などの質問を受けました。

しかし、現実的な段取り・段階としては、公務員試験には、まず「学力試験」を中心とした「一次試験」があります。まだ、一次試験も合格していないのに、二次試験の心配・対策って早くはありませんか。余計な心配ですよ。一次試験は学力試験であり、一般的には10分野程度の試験科目があります。例えば、数値解析とか英語、国語、憲法、日本史、世界史、政治学、経済学、現代史など、いろいろな社会常識的な質問が10科目程度出題されます。それらを100点満点中で、70点から80点ぐらいまで取れば、一次試験は大体合格すると思います。

そこで相談にきた学生に対しては「今一番、最初にやらなければいけないことは一次試験に受かるための勉強をすることです」と助言をしました。一次試験は5月末頃から始まります。国家公務員が5月、6月いっぱいが県、その後が、市町村です。

彼らに「毎日、何時間、勉強していますか」と聞くと、「えっ？…勉強？…」って聞き返します。再度、「何時間、勉強しているのですか」と聞くと、「うーん、2時間か3時間」と答えます。しかし、私は「この時期は、毎日20時間近く勉強しなさい」と無理難題を言っています。

3年生なら「3ヶ月間は8時間以上勉強しなさい」「そして、模擬試験を沢山受けなさい。公務員対策の予備校に行きなさい」「サークルもやめなさい」「彼女との付き合いもとりあえず切りなさい」「彼氏の付き合いも3ヶ月間だけ切りなさい」「試験に受かることだけに興味を集中しなさい」「何かを我慢・抑止しないと人生の展望は開けません」と注意しています。

私は一次試験のお手伝いはできません。私の主担当は、主に「二次試験」からです。一次試験に合格すると次が面接試験です。各県や市町村によってやり方が異なりますが、静岡県の場合は4

回程度、面接をやると思います。面接の内容も、集団面接やグループワークなどをやり、さらに、個別面接と最終段階に進んでいきます。

昔は、100人を採用するとしたら、学力試験で130人、30人余分にとり、そして次の面接で30人落とすという感じで試験をやっていました。しかし、今はある得点まで、だいたい70点くらいで合格ラインを設定して、その範囲に入った人が2次試験に来るわけです。

そして、合格の可否の判断基準としては、主にその人の人格や職業観、社会のあり方に対しての基本的な考え方や認識、面接での受け答えなど、「人物評価」の要素が重視されています。当然、学力試験の競争率は、一般的には10倍とか何十倍にもなるんですが、一次試験、二次試験と進まなければ、人生の次が開けません。

20時間も家で勉強することは嫌なことじゃないですか。辛いじゃないですか。つい飲み屋に行きたくなっちゃうじゃないですか。しかし、自分の時間を大切に、受験戦争だというこの時に集中する。長い人生のなかで3ヶ月ぐらい、1日最低8時間から20時間、勉強すること。なんでそれができないのか。僕はずーっと言い続けてきています。そのことができない学生が多い気がします。この苦勞、そんなに難しく、辛いことなのですか。耐えないと春は遠のきます。

高校生の皆さんは、これからいろいろな大学を受験するわけですが、受験戦争のハードルを乗り越えて合格を目指してください。大卒者としてのキャリアや資格は、「人生の武器」です。現実の実力のほどは別にしても大学を卒業できた経歴は、それなりに4年間を乗り越えてきた、社会的な「証」なのです。

例えば、都留文科大学は、120数単位以上を取らなければ卒業はできません。卒業論文も書き、フィールドワークにも行かなければなりません。私が所属している「社会学科環境・コミュニティー創造専攻」では、現場に行くことが必須です。卒業に必要な単位をとること、卒業論文を書くこと、どれもみんな大変です。しかし、これらの制約・フィルターを淡々と乗り越えてこられた学生は、それなりの我慢力とか忍耐力・集中力・現場力・実践力を身につけている学生だとの社会的な評価を受けられ、就職ができるわけです。

2 将来を見据えて愚直に勉強する

人生は先を見ると、あれもやらなきゃいけない、これもやらなきゃいけない、いやなことばかりが待っていると不安になるかもしれませんが、「足元」を見て一つ一つ困難を解決していけば、たいしたことじゃないんです。好きなことだったらインターネットじゃないけど、携帯電話じゃないけど、皆さんは夢中になれるでしょ。人が前を歩いていたら、携帯電話を操作しながら歩いているじゃないですか。皆さんとは言いませんが、お年寄りでもなんでも邪魔みたいな感じで平気で歩いている。あれは集中しているから、そんな行動になるのでしょう。その集中力を、就職試験の集中力に活用・転換してもらえればいいわけです。そうすれば、人生を自分が創っていくということに連動していくのです。

ですから、私のところに相談に来た学生には、「2次試験が受かったら来なさい」「落ちたら、落ちたことをマイナスに考えないで、次の試験に臨み、どんどん次の試験を受けなさい」と助言

しています。「どんどん落ち続けなさい」「そうすれば要領が分かるし勉強の仕方も分かる。自分のどこが不足しているのかも分かる。いつかは必ず受かる」「落ちたから人生を失敗したわけではない。また次のチャンスが必ず来る」と励ましています。

次の試験まで、あと1年あると考えがちですが、よく考えてみて下さい、2次、3次、4次試験で落ちてしまう学生もいます。4次試験になると、時期は、10月になってしまいます。10月になると、もういくところがなかなか見つかりません。落ちた学生が、私のところに泣いて相談しに来ました。「先生、悔しい」「2人残ったけど最後の1人に残れなかった」、そう言って来るんです。そういう学生には、「でもよく考えてみたら、2人残ったうちの1人に入った。25倍の競争率を勝ち抜いて、最後の2人までに残ったのだから落ちてても凄いことですよ」と励ましています。

そして、「冷静に考えてみてください。来年の5月まであと何か月あるのか？」と。そうでしょう。10月、11月の話です。5月20日頃が次年度の試験日です。もう半年しかありません。次の試験日は直ぐ目の前にくるんです。それなのに涙を浮かべて、「できませんでした。人生がどうなるのか分かりません。私は卒業した方がいいんですか。それとも留年して大学に残ったほうがいいんですか」とか、「次の就職する時に私のキャリアに傷が付きませんか」とか相談に来るんです。キャリアなんか当然ありませんよね。「そんなこと余計な心配だ。とにかく次を目指して愚直に勉強しなさい」と言っています。

3 人生の選択権と判断は自分にある

とにかく高校時代、いろいろな迷いや不安を抱え、悩み、苦しむことは当然です。しかし、それらの雑念を振り払うように、懸命に勉強し、集中しなくてはゴールには届きません。目的があって、強い意志と目標があって初めて、何のために生きているのか、勉強しているのか、自分の立ち位置が理解できるのです。

自分が、今、どこに立っていて何をしようとしているのか、それが明確に理解できていないと迷走することになるのです。その課題を、払拭・解決するためには、人生の目標を明確化し、理解しなくてはならないのです。

都留文科大学だけが大学ではありません。色々な大学がたくさんあります。大学を選択して、自分の人生、将来を決めて行く、重要なステップになるものです。4年間という人生の貴重な時間を使い、多様な専門性を身につけ、「人生の栄養」にしていく重要な時期なのです。その時間を何処で過ごすかということは、自分の人生を充実させるための「ステップアップ」「キャリアアップ」のためにも自分ごととして真剣に考えて下さい。行くべき大学を、高校の先生に推薦・指導されたから選んだ、決めたでいいんですか。「成績がこの程度だから、この程度の大学にする」と、思ってしまうないようにして下さい。人生の選択権と判断は、皆さんの主体性・自己責任に委ねられています。親にあるわけでもなく、先生にあるわけでもないんです。選択権を有益に使ってください。そうしないと後悔すると思います。

私の高校時代は、社会に対しての「反骨心」「反発心」があり、高校の先生の言うことが真実

だと安易・単純に理解できない、思想と社会が混乱している激動の時代でした。「自分の人生は自分で決める、人からは指示を受けたくない、人生の選択肢は自分が握っている、人生は自由を楽しむことだ」という基本的な考え方をもち、高校時代を送っていました。特に、今後、「何のために大学に行くのか」についての明確な理由を見つけることができず、秘かに悩んでいました。

そこで、思いついたのが、「農業」でした。人が生きていくために必要不可欠な食糧を生産する土と水、緑に関わる分野に、妙に関心が高まったのです。当時は、東大紛争の時代、既存の社会体制を壊そうとする革命思考の時代でしたが、そんな過激な社会運動に疑念を持っていました。

4 自分の進路は自分で決め、自己責任で生きて行く

古い話ですが、私の高校時代、北海道大学から始まって岩手大学、宇都宮大学、茨城大学、東京農工大学、三重大学と、農業系のある大学の学部長宛てに、「あなたの大学はどういうことを学校の理念にしているのか、どんな人材を育成したいと思っているのか、どんな分野に就職先しているのか、先輩にはどんな人たちがいるのか、具体的なカリキュラムはどうなっているのか、学科長、学部長として推薦する先生を3名あげてください、特徴のある授業は」など15項目にもわたる「質問状」を郵送しました。

私は、どこからも返事がこないものと思っていました。しかし、東京農工大学の石橋豊農学部長が、直筆で25頁にわたって、私の依頼した15項目の質問に、ひとつひとつ丁寧に的確な返事を書いて返送してくれました。私は、石橋豊先生のこの手紙を見て大変感動し、絶対に、この東京農工大学に合格するぞと心に決めました。

その他の大学からは、東京教育大学（今の筑波大学）と三重大学から、学部長の自筆で数枚の返事を送ってくれました。他の大学からは、一般的な大学案内が送られてただけでした。皆さん、東京農工大学は素晴らしい大学だと思いませんか。

皆さんは、都留文科大学に行きたい、あるいは他の大学に行きたいと考えた時に、その大学の多様な情報を自発的に集めますか？先ほどから言っているように、皆さんの大切に貴重な人生の一時期、青春時代を、その大学で過ごすんです。それらの大切な選択肢を高校の先生など、他人に委ねてしまうのですか？自分で考え、決めないんですか？自分で自分の人生を切り拓いて行こうとする強い意志はないんですか？—と、聞きたいんです。

私は、東京農工大学から届いた石橋豊先生の手紙を、当時の進路指導の先生に持って行き、「先生、私はこのように独自に大学情報を収集し、自分にとって適切だと選択したので東京農工大学に行きたい」と説明しました。すると、先生は、「渡辺君、そんなことをやっている暇があったらもっと勉強して成績をあげなさい」と注意されました。その時に、この高校は、成績至上主義の没個性・画一的な受験校だと確信し、先生の指導は聞き流し、自分なりの受験対策に懸命に取り組みました。

学校では最終試験後に3年間のオール成績が出ます。3年間で要は何番だったかという成績です。当時の私の成績だと、「東京教育大学理学部に行ける成績だから、そこに行きなさい。何でわざわざ他の大学の農学部を選択するの」と言われました。「人の将来をそんな画一的な基準・

判断材料で選択・決定してしまうのか」と馬鹿らしく聞いていました。先生に、「これからの日本の農業を、あなたはどう考えているんですか？」と聞いたところ、「生産性の低い田んぼを使って、国内で米などの食料を生産しているよりも海外から安い米を輸入すればいいんだ」と言われました。とにかく、日本の生産基盤の将来を見据えた、大局的な考え方を持ち合わせていない、狭小な知識人だと高校生ながら、その認識の低さに呆れました。

だから、皆さん、高校の先生はおしなべて立派だと思わないでください。いやいや、すみません。多分、立派です。長く生きている分だけ立派です。それは別として、何が言いたいかと言うと、その程度だということです。ですから、その程度の先生に皆さんは振り回されないでください。自分の人生ですから、自分の独自の判断と責任を持って生きていく。それで受験に失敗したっていいじゃないですか。自分で選んだ結果だから諦めもつき、納得もできると思います。

私は、その後、東京農工大学に合格して、どうしても石橋先生に会い、教えを乞いたいと思い、懸命に勉強に取り組みました。東京農工大学の試験のとき、試験が終わると張り紙がしてありました。「渡辺豊博君、石橋豊研究室に寄りなさい」と書いてありました。石橋先生のところに行くと、「おう君か、それなりのいい顔つきをしとるなあ」と言われ、「どうだった、今日の試験は」と心配してくれました。「いや、意外に簡単でした」「たぶん大丈夫、合格確実だと思います」と不遜な態度を取ってしまった、未熟で情けない話です。ああ、この先生が一生懸命に、私への返事を書いてくれたんだなあと実感し、感謝と尊敬の気持ちを持ちました。

5 自分の人生は自分自身で演出する

先ほど、一步踏み出す「勇気」の大切さを話したように、皆さんの人生は皆さん自身で演出・決定していくんです。皆さんがコーディネートするんです。皆さんが人生の舞台の主演なんです。

ミュージカルじゃないけど、自分の人生を成り立たせるためには、舞台を作る人、照明の人、衣装の人、切符を切る人、そういう多様な役割を担う人たちが必要になります。それらの仲間が同志であり家族です。お父さんやお母さん、お爺ちゃん、お婆ちゃん、先生方だと思います。

最大の舞台の基盤作りは、今やらなければいけない数学や生物、世界史、日本史、英語、国語などの基礎的な科目を、しっかりと勉強することです。基礎的なことを理解して、人生の舞台を強固にしないといけないのです。基盤となる舞台が強固でないと、演劇中に壊れちゃうでしょう。浅田真央さんが、氷上でどんな立派な演技をしても、アイスリンクをきちっと作る人がいて、初めて素晴らしい演技ができるのです。例えば、オリンピックの舞台は、そのような下積みの人たちの努力と役割によって、成り立っているのではないのでしょうか。

自分の人生、将来は自分自身の努力と研鑽により演出して行ってください。

第3章

1 君は日の当たる道を目指したいのか

私はイギリスに何十回も行っていますが、皆さんはマンチェスター・ユナイテッドを知っていますね。私はそのサッカーの試合をホームで2回見えています。切符が全く取れません。7万円ぐらいで買って試合を見ました。その時の会場の興奮度は半端ではありませんでした。

しかし、私が一番、驚いたのはハーフタイムでの出来事です。選手が誰もいなくなったグラウンドに砂袋と地面を叩く板を持った老人が、一人だけ、芝生の真ん中に現れます。球場に現れると観客が立ち上がり、そのお爺さんに対して拍手を送ります。

お爺さんが何をしているのかというと、前半の試合の時に選手が芝生をカッティングするでしょう、そうするとグラウンドが破損するじゃないですか、その破損・凹凸したところに土を入れて、水を撒き固めているんです。そのお爺さんに対して、観客が立ち上がり感謝と敬意の拍手を送るんです。

皆さんはボールを追う人になりたいんですよね。光のあたる人になりたいんですよね。有名になりたいんでしょう。お金持ちになりたいんでしょう。その希望は否定しません。しかし、怪我や病気になったらどうなるのでしょうか？多くの有名サッカー選手は選手生命が長いんですか。

イギリスは階層社会ですが、草むしりのお爺ちゃんだからといって蔑視したりするような社会ではありません。一人一人が社会の中で重要な役割を果たしている、その社会の中での役割に対して評価する、これが「民主主義」です。太つていようと痩せていようと、金持ちであろうと貧乏人であろうと、変な言い方ですが、障害を持っていようと、心に闇を持っていようと、そんなことはたいした問題ではありません。

皆さんには、「社会の中で生きているんだ、生きてきたんだ、生きていくんだという強い意志、考え方をもって、堂々と生きていていただきたい」と思います。大学に行くことだけが人生じゃないでしょう。大学に行った人が、そんなに立派ですか？人生は長いので、今を短絡的に判断・評価するのではなく、新しいキャリアを身につけて成長していけばいいのです。狭い範囲で自分を判断・評価しないで、皆さんには、山のような可能性が満ち溢れているのです。その可能性にかけて、自分の人生に自信と確信を持って、どうどうと生きていてもらいたいです。

実は、そのグラウンドキーパーとお話をさせていただいた時、握手をさせていただきました。皆さんは握手するときは、片手でしますか。私はいつも両手でしています。彼と両手で握手をしたら、彼が驚いて、私に言ったんです。「君は珍しいね。何で両手で握手をするんですか」と。それで僕は「いや、右と左で一人の人間じゃないですか。ですから、右と左の両手で、あなたのこの名誉ある手を…」と、答えました。

彼の手の甲は、とてつもなく厚く力強さを感じました。指がとにかく太いんです。グラウンドの土の乾燥度を、どのように調査するのかと聞いたら「舐める」と言いました。土を舐めて食べるんだと。そうすると酸性が強いとかアルカリ性が強いとかが全部分かると言いました。

ちょっと言い忘れましたが、何故、彼が評価されているかというと、マンチェスター・ユナイ

デッドのサッカーグラウンドは怪我をする人が少ないからです。サッカーをやっている人は怪我をしたら終わりでしょう。スポーツ選手は皆、怪我に神経質です。彼は、芝生に凹凸ができると平らに切って土を入れ叩いて固くします。毎日、サッカーをしているわけじゃないので、シーズンオフの間に芝生を植え、徹底的に管理をしているのです。

水や土の管理、凹凸の管理などに常に細心の注意を払っています。だから、あの球場では怪我をしないので、あそこでサッカーをしたいと、そして我々選手の生命をこうやって長く守ってくれているのはあのお爺ちゃんのお陰だと、そう言って、サッカーの一流選手は皆、彼を尊敬しているわけです。私は、彼の手を握らせていただいた時に、人間としての自信と誇りを感じました。

2 君たちは自分に正直な道を目指したいのか

このイギリスのグラウンドキーパーに似た仕事をしている人が、甲子園球場など日本の球場にもいます。甲子園球場に行ったら、グラウンドの整備状況をよく見て下さい。バッターボックスや一塁、二塁、三塁などの「土の色」を見て下さい。その部分は、他の場所とは色が違ってきます。特にバッターボックスは、黒色や赤色、白色など、いろいろな色があります。

この状態は、グラウンドキーパーが、地面の凹凸状態を調べ、適切な対処方法を考え、臨機応変に対応している証です。この土の状態には、どの程度の水分が必要になるのか、全国の色々な種類の土を混ぜて凹凸、破損部分にまき叩き固めます。固すぎると怪我をするし、柔らかすぎると足を取られるし、安全なグラウンドを維持するために土の硬度を常に監視し調整しているのです。

甲子園球場は、野球球児にとっては、「夢の球場」です。野球選手が力を入れる場所や滑る場所などに合わせて、土の種類や硬度を調整し、なるべく選手が怪我をしないように配慮・対策してくれているのです。仕事とはいえ、常に緊張感を持って、地味な仕事を堅実にこなしている「影の立役者」の存在・役割があるからこそ、安全な甲子園球場が維持管理されています。

皆さんは、今後の仕事として、「日の当たる人生」を目指したいのか、イギリスや日本のグラウンドキーパーのような、自分の仕事に正直な「裏方のプロ」になりたいのか、人生の役割・方向性を決めなくてはなりません。

3 大学ばかりが人生ではない

私は、農家の皆さんは、農の職人、専門家だと考えています。食べ物・生き物を相手にした多様な現場での知識を必要とする仕事です。私は、これからの社会の中で注目される仕事は、その道の専門家・プロといえる「職人」だと考えています。実は、私も高校時代には、職人になりたいと考えていました。

私は、親一人子一人の母子家庭であり、生活は苦しく貧乏でした。高校時代から奨学金を貰い、大学でも貰ってました。お金がないので、早稲田大学とか慶応義塾大学など、授業料や入学金が高い私立大学を受験することは、全く念頭になく、国立大学一期校と二期校を受験する2回のチャンスしか与えられていませんでした。でも追い詰められた気持ちはまったくなく受験が失敗したら、「大工」を目指そうと気軽な気持ちで勉強していました。

高校卒業後、大工として就職し、棟梁に付き現場で修行し、腕を磨きながら、まずは2級建築士の免許をとり、その後、さらに現場経験を積んで、最終的には1級建築士の免許を取ることを考えていました。何故、大工かという、私の親戚の叔父さんが大工の棟梁をやっていたということもあり、叔父さんのところに弟子入りしようと思っていました。

物をゼロから作って、形を成していくことは、創造的な仕事であり、自分の個性や得意技が発揮できる自分に適合した仕事だと考えていました。とにかく、今後の自分の人生に対して「捨て身」の考え方だったのかもしれませんが、生意気に「大学ばかりが人生ではない」と強い信念を持っていて、受験の失敗を恐れる不安感はありませんでした。

今から思うと、将来の方向性が、どんな状況に陥ろうと、自分としては、最終的には、大工・職人になるんだとの強い意志を持っていたので、あまり迷いもなく、いろいろなことに対して腰が据わり、集中でき、前向きに対応できたのではないかと考えています。人生、迷ったり、不安な気持ちを持っていても何も変わらないし、生産的なことにはならないことを、高校生にしては生意気に、人生を達観して、気軽に考えていたのではないかと思います。

4 農業には自然との共生の知恵がある

皆さんは、この高校で野菜を作ったり、お米を作ったり畜産をしていらっしゃるんですよね。この高校の前進の農業高校時代を含め、私は県庁時代、皆様方の先輩と一緒に仕事をやってきました。そういう意味では、農業高校の卒業生の特性や技術力などについて知っているつもりです。

県庁の中でも農業土木というか農業をやって来た人は、仕事に対する意識や取り組み姿勢が、他の県庁職員の人たちとは、物事に真摯に取り組む地道な姿勢などで違いを感じていました。

ところで、農業土木と土木とでは、社会的な役割として何が違うのでしょうか？静岡県職員の採用試験の専門職分野の試験問題を作成したことがあります。また、面接の時、受験者に聞く質問もいくつか作成しました。例えば、「農業土木と土木の特徴の違いを答えなさい」というものです。農業土木と土木の違いがわかりますか。農業土木というのは「コンクリートに血が通っている」ということであり、受益者である農業者の思いや生きものたちへの配慮など、多目的な要素・機能が、コンクリートの中に含まれていることを意味しています。

しかし、土木というものは、「コンクリートに血が通っていない」不特定多数の受益者を対象とした構造物であり、環境や生き物への配慮など、多目的な要素を念頭においた物づくりとはいえません。トンネルや橋、高速道路などを建設・整備することに特化した技術だともいえます。

ところが、農業土木の仕事は、農業用水のトンネルを建設することであり、その水は、生物たちの「命の水」になります。トンネルを、水が流れることによって、今まで水が行かなかったところに水が届き、そこで作物が生産され、多くの人たちの生活が支えられます。

また、水が地域に供給されることによって、カエルやトンボなど、多種多様な生きものたちが生きていける水辺自然環境も確保されるわけです。ヒートアイランドにも貢献し、地球温暖化対策の一助にもなり得ています。そのように、農業土木の仕事は、多様な社会的な役割を担っており、人生の中で自分の仕事として誇りを持って、一生取り組んでいってもいい、素晴らしい仕事

だと考えています。

5 台湾では何故日本人が尊敬されるのか

私は今、年間2回程度、台湾に出かけて行って、大学や市民活動団体に対して講義や講演をしています。台湾に行くと、日本人を尊敬の目で見ることが多いと思います。今、台湾は激しく「中国化」が進んでいますが、台湾の人たちは中国人が嫌いなようです。何故かという、中国人は、何かにつけて「賄賂」を要求してくるからだと聞いています。日本人は、賄賂を前提にした仕事をしませんよね。だから台湾の人たちは、日本人を尊敬しているようです。

そうした中で、私が行く仕事とも重なりますが、一番尊敬を集めているのは、日本人が昔、建設したダムや水路、圃場整備や灌漑施設等に対してです。日本人が建設した施設は、50年前から70年前に建設したものです。水路橋や灌漑用施設などですが、老朽化や劣化もあまり見られず立派に機能しています。日本国内で東京オリンピック後に建設した道路や橋などは、老朽化が進行して壊れ始めているのに、台湾で日本人が建設した施設は、どうして壊れないのでしょうか。

当時の日本人、特に農業土木技術者の技術力や設計力が極めて優れており、台湾の現地の実情に適合した最適な構造物・施設を建設したことに起因しているためと考えられます。だから台湾の人たちは、日本人の技術力や仕事に対するプロ意識とか、専門性に対して尊敬の気持ちを内在しています。農業土木を学ぶ皆さんは、海外からその専門性を尊敬・評価されているといえます。

とにかく、農業土木の勉強を真剣に進め、技術力と専門性を磨いて下さい。また、食物を作ること、食文化、食育も含めた農業全体の包括的な知識の習得や専門知識の蓄積が、大学に行くにしろ、高校で就職するにしろ、人生を生き抜いていくための基礎的知識として大事だと思います。

6 自分の故郷には可能性と未来がある

そのような観点から見ると、この高校の先輩たちが昔から培ってきた伝統や校風・特徴は、新たな時代の中で、ますます輝きを増してくる知識になるのではないかと思います。別に法学部とか文学部とかを否定するわけではありませんが、私はやはり農業というものに強く拘っています。農業は生き物たちとの関わり合いの仕事です。農業は人の命と生活を支える国家の基盤です。

今後、ますます若者が、農村地帯から離れて行きます。農村地域は、ご存知のように日本の固有文化が根付いている日本の「礎」です。文化風土の礎、食料生産の礎、環境の礎です。そこが、若者の流出とともに、加速度的に弱っています。皆さんには、そうした礎づくりに関わる知識をさらに磨いていただき、故郷に帰って、専門性を還元していただきたいと期待しています。

私は自分のゼミ生に対して常に、「故郷に帰りなさい」「東京などの大都市には夢はない」と言っています。故郷に戻ろうとすれば、多分、就職率は良くなります。故郷は若い人たちの帰郷を懇願しています。私は、今まで、たくさんの学生を故郷へ帰しています。そして皆、地域で一定の社会的な役割を果たしています。

故郷には、多様な地域資源が活用・利用されずに放置されています。文化歴史資源、景観資源、人的資源、環境資源、食文化資源、街並み資源など、それらの魅力を発掘し、地域の個性と特性

を踏まえた付加価値を付け、マーケティングに乗せて、販売していけば、新たな「ビジネスチャンス」が創造・創業できます。

田舎を馬鹿にしてはいけません。皆さんの若き発想と行動力が、故郷を変革・元気にしていく原動力になり得るのです。既存の組織に就職することも一つの人生ですが、田舎を舞台に自分の人生を自分で創っていく創造的・挑戦的な人生もあることを考えてみてください。人生とは、未知なるチャンスにあふれた、楽しく苦しい「夢舞台」だといえます。自分に自信を持って難題に挑戦していきましょう。

7 資格をとることは人生の武器を持つことだ

故郷に戻るためには、いろいろな資格を取得してください。企業で面接を受けようとした時に、企業は「大学の4年間で何の資格を取ったのですか」と聞くでしょう。ある学生に資格を持っているかと聞いたところ、「持っていません」と答えたので、「それでは大学時代に何をやって来たの」と聞くと、「どんな資格を取ればよかったですか?」と聞き返すので、「君は、英検何級を持っているのですか?」と聞くと、「4級」と答えました。4級は中学校一年程度のレベルです。私ですら高校時代に準1級をとっています。それで、「少なくとも英検2級ぐらいは取ったほうがいいんじゃないの」と言ってあげています。自分磨きの問題意識の欠如を感じます。

台湾や韓国の大学では、英語で授業をしていると聞いています。昨年6月22日に世界文化遺産の審査を傍聴するために、カンボジアのプノンペンに行った時、プノンペン大学の学生に何ヶ国語を喋れるのかと聞いたところ5か国語という返事が返ってきました。

カンボジアは元フランス領でしたからフランス語は上手です。英語は、大学の授業も高校時代も含め英語で行われていて、公用語が英語ですから、新聞もテレビも全部、英語で放送しています。ベトナムが近いので、ベトナム語も喋れます。ベトナム語を喋れると中国語も喋れるようになるようです。スペイン語も喋っています。カンボジアの学生は、5ヶ国語ぐらいは理解できる人が多くいます。経済的に貧しいと思われる国の大学生は、言語はグローバルであり、国際的に通用する基礎学力を有しています。皆さんは、海外を舞台に対等に彼らと会話できますか。

皆さんは、英語は得意ですか?バカにして聞いているわけではないのですが、いや、馬鹿にして聞いているかもしれません、世界は英語を共通語にした言語領域になっています。皆さんは、カンボジアを後進国だと考えていますか。確かに子供たちは裸足で歩いています。確かに、固定電話はありませんが、携帯電話は普及しています。その携帯電話は、世界中に繋がる携帯電話です。皆さんの携帯電話は、直ぐに、ここからカンボジアに繋がりますか?

もう時代のあれこれを飛び越えて、次の新しい価値感や機能領域に入っています。言語は「意思疎通の道具」といわれていますが、英語は国際社会での共通語・公用語であり、喋れ、理解できることは常識化しています。

日本社会はグローバルな方向に動いています。グローバルな世界とは、どういう世界を意味しているのでしょうか。グローバルとは、まず言語に多様性があることです。基本的な国際語、公用語である英語を皆さん、しっかりと学んでください。これはしっかりと学んでこなかった、私

自身の反省から皆さんに「愛の警告」を発しているんです。世界で頑張って貰いたいから期待して忠告しています。言葉磨きが、就職のチャンスを増やすことに連動していくのです。

今、地方の小さな10人以上の会社でも世界と繋がっています。インターネット上で部品を世界中に販売しています。それらの商売を当然、英語で対応しています。だから10人の小さな会社だから英語が喋れなくてもいいと思うのはとんでもない間違いで、かえって地方の小さな会社のほうが、グローバルにボーダレスに世界と取引をしていることが多いのです。

地方の小さな会社の方が大会社より、いろいろなチャンスもあるし、海外にも行けるので面白いじゃないですか。今、社会がそんな国際的な状況になっているんだということを的確に自覚・把握していただきたいんです。「私なんか無理って」言わないで欲しいんです。今からNHKラジオの基礎英語を勉強してください。自転車に乗ってガンガンわけの分からない音楽を聞くより、ラジオの英会話放送を30分でもいいから聞いて勉強してください。

8 どこにいても新たな試みに挑戦する

静岡県庁には海外研修という制度があり、若い時に1ヶ月間、研修費として100万円を支給していただき、東アジアの農業事情を現地調査してきました。英語の試験があるので新幹線での通勤時間中にラジオの英会話教室を聞いて勉強しました。1年半経つと、だんだん耳が英会話に慣れてきます。英語は得意ではありませんでしたが、海外に出かけ、異国の雰囲気を経験し、多様な人々との交流が、自分に新たな刺激と問題意識を醸成するのではないかと気持ちで懸命に勉強しました。日常生活の中では、新たな試みへの挑戦には躊躇すると思います。しかし、逆転の発想で、新たな試みへの挑戦が、人を刺激し、物事への集中力を高め、少々の困難にも挫けない忍耐力を養成していきます。問題から逃げよう、避けようとする姿勢では、人は成長しません。

今もまだ、この研修制度があります。是非とも、静岡県庁に入庁されて挑戦してみてください。人生は、「いい加減」な感覚が大事です。この意味が解りますよね。「良い加減」を指しています。私が自己学習した、「人生訓」の1つ目は、まさにこの「良い加減に生きること」、2つ目は、「死んだふりをして楽しい自分の人生を全うすること」です。一生懸命に仕事には取り組むんですが、少しは力を抜き仕事や人生を楽しく過ごすんです。そうやって社会を効率的に生きていくんです。

9 自分に正直な生き方は疲れない

人生にはやるべきことがいっぱいあります。私は大学教授で週3日大学に行き、授業を前期と後期とも1日に3本の講義を開講しています。朝は9時10分から始まり、各講義の間の休憩時間は10分間しかなく、昼休みも40分しかありません。3本講義をやっていて4.5時間、立ちっぱなしで講義をしています。自分の天職・社会的使命だと思い、一生懸命に若者の人材育成に取り組んでいます。

そんなわけで長く、土曜日や日曜日での完全休日はありません。もう7年間ぐらい土日曜日を休んでいないと思います。明日の日曜日も、富士山の湧水調査に行かなければいけないので、終日、潰れます。来週も行事があり、再来週はどこかに講演に出かけます。しかし、不思議なこと

に、あまり精神的な疲れを感じません。感じないので、休み無しの状況が長く続いています。

大学教授としての仕事以外に、NPO 法人グラウンドワーク三島の専務理事を担っています。また、NPO法人富士山測候所を活用する会の専務理事でもあります。ついでに、今までの NPO の役職をあげると、富士山クラブ、三島ゆうすい会、三島ホテルの会、源兵衛川を愛する会など、9 つもの NPO の事務局長を担ってきました。

家庭的な話ですが、子どもは3人いて、私はボランティアに明け暮れ、妻が現実的な育ての親です。PTA会長もやり、町内会長もやり、結婚式の司会もやり、お葬式の司会もやりました。1人の人生には、1つの生き方だけが限定されてあるわけではなく、さまざまな組織や立場を通して、自分を自己表現する場は沢山あります。それらの多様な社会的な役割を横断的に串刺しすると、社会的な多様な担い手が増え、地域社会は豊かになります。自分が持つ多種多様な能力を、さまざまな場や機会で発揮することにより人生の楽しさを実感することができるのです。

10 いやだと思ったら止める

私は「疲れたなあ」と感じたら、それ以上、無理して仕事をしません。すっぱりと止めてしまいます。グラウンドワーク三島だって、嫌だと思ったら平気で止めてしまうでしょう。「責任ある立場で止めてしまい問題はありませんか」と言われても、そんなことは無関係で嫌なら止めてしまいます。嫌なものは嫌なんです。ですから、自分の心根に正直に止めてしまいます。既存の決まり事に我慢してまで、精神的にも体力的にも拘束・束縛される必要はないんです。

しかし、しっかりとやろうとすると、いろいろな困難や障害が発生します。これが、現実社会の実態であり、なかなか避けて通れません。自分の反発心を押し殺して我慢しなくてはなりません。しかし、その我慢や忍耐は、捨てたものでもありません。何故でしょうか。賛否、いろいろな考え方を持った人々と話し合いができて、現実社会の複雑性を理解・学習する機会を持てるからです。

例えば、昨日、私は静岡新聞三島支局長と一杯飲みました。三島での裏話や最新情報を交換・把握できました。話が盛り上がり、寝たのは夜中の1時半です。あまり寝てないのに、結構、元気そうに見えるでしょう。今日も毎日新聞の記者が東京から来て取材を受けるんですが、終了後、飲みに行くことになるでしょう。

このように、昨日はグラウンドワークの話をし、今日は富士山の話をする、折々に話の内容が変動します。このような生活、皆さんは、どのように評価しますか。楽しそうに見えますか？申しわけないのですが、これが私の人生です。悔しかったら、真似してみろという話です。こんな生き方、いかがですか。私は楽しく、疲れないので、今後とも嫌だと思いうまで止めません。

11 自分の道は自分で探す

実は、私の体重は107キロで、3月中旬にニュージーランドに旅立ちました。あまり美味しい料理が無いので、102キロに減量するのではないかと期待して、ニュージーランドに10日間滞在しました。しかし、帰国後体重計に乗ったところ、110キロに増えていました。今、精神的に

ショックを受けており、どうやって生きていっていいのか、悩んでいます。妻は痩せることに協力してくれているのに、野菜中心に健康に気づかった家庭料理を作ってくれているのに、何故、効果がでないのか。もっと家庭を大切にしたいと思います。

先ほど「人は何のために生きるんですか」という話をしましたが、そのところが大事だと思います。しかし、その質問には、なかなか明確な答えが出ないと思います。その答えを見つけるためには、「キャリアアップ」「ステップアップ」していかなくてはなりません。そして、人生は「迷走飛行」ですから、大いに迷走していただきたいんです。

私はあまり失敗してこなかったので率先して、失敗しなさいとは皆さんに言いません。いや、よく考えると、私も今まで多くの失敗を繰り返してきています。しかし、困難があっても物事を楽観的に考え、今回は、失敗しないように努力・改善・工夫すればいいのです。失敗は良き経験として自分に蓄積されていきます。その繰り返しにより、精神的な忍耐力が身につきます。そのためには、常に前へ前へと向かって前進あるのみです。無理をしては駄目です。やみくもに全力で走っちゃ疲れます。ゆっくりと一歩一歩階段を登るように、高みを目指して行ってください。

12 高いところに登ると自分がよく見える

何故、高いところに登ってもらいたいのか分かりますか？高いところに登ると、全体の様子がよく見えるからです。「あそこで野球部が手を抜いて練習をしているとか、ピッチャーが賢明に投球練習しているとか、2人あそこで話しているけど監督の方は太っていて偉そうにしているとか」上から見てみると全体の様子が包括的に見えるんです。しかし、平面的な視点、監督と同じ目線では、鬼のような顔して厳しく選手を怒り、ハアハア言いながらノックをやっている監督しか見えない、わからないのです。

高みから物事を見るためには、高いところに登っていくための実力と知識を身につける必要があります。高みに登ることは、社会を総合的に見ることにつながり、俯瞰的、鳥瞰的とも言いますが、富士山の模型を周りから見るように、社会の実態がよく見えます。「ここにこんな寄生火山があるのかとか、富士山にある23の寄生火山が見えるとか、青木ヶ原と朝霧高原では植生が違うとか、富士五湖はそれぞれ高さが違うが繋がっている」とか、上から見ると理解しやすいのです。しかし、湖岸からは湖周辺しか見えず、視点や考え方が狭くなってしまいます。

13 強い信念と哲学を持って生きていく

皆さん、情報を集め、自分なりに判断できる材料を自分の手元に置き、そして、どこの大学がいいのか、自分の人生と照らし合わせて決められるのがいいと思います。有名大学に行くのもいいでしょう。実は、私は早稲田大学や立教大学、常葉大学で非常勤講師をしており、他の大学の学生の様子や現状を知っているつもりです。

例えば、ある大学では、8年前はその大学を卒業し就職した学生の内、3年以内に就職した会社を辞めてしまう人は23%位いたようですが、昨年は34%。10人が企業に入っても3年以内に3人近くが辞めてしまいます。一流企業に入社する、優秀なので懸命に仕事に取り組む、しかし、

人間的・精神的な強靱さや課題解決力、臨機応変な対応能力に欠けていることから、多様な課題処理に迷い、押しつぶされてしまう。やがて会社の中で自分がどう役だっているのか、何のためにこの会社に入ったのかが分からなくなってしまい精神的にも病んで行くんです。

皆さんは、高校の中でもそうですし、これから大学に行ってもそうですが、立派な会社に入ったら迷いは同じというか、心根というものを強く持って生きていかないと仕事を続けられないということになります。慌てなくていいんですけど、今のうちから強い気持ちを持っていただきたいと思います。

14 被害者意識では社会は変わらない

最後に、被災地の今の状況をお話すると、一言で言って、人間不信が増大していると思います。あれだけたくさんボランティアが被災地に来て、人と人の絆が大事だといい、抱き合い、命をかけて、今後も応援に来ますと言った高校生や大学生が、現在、ほとんど被災地に来ない。携帯電話を頻繁に掛けますと言った人から、小学校4年生の女の子に対してメールすら来ない。「何を考えているのですか」と私は、被災地の皆さんから怒られています。「先生は学生に何を教育しているんですか。今の学生はメール一つ送れないんですか。あれだけ一緒に頑張ろうと励まし合った学生はどうなったのでしょうか」と、私は質問を受けています。

私に関わっている、グラウンドワーク三島は、今後、10年、20年と被災地に関わっていきます。しかし、NPOやボランティアが急激に来なくなり、被災地の皆さんとの心の交流が続かない、こんな情けない失礼な支援のあり方であるんですか。子どもたちは傷ついています。大人たちも不信感でいっぱいです。確かに、その時に被災地の人と気持ちが一体化した、絆ができた。しかし、その後は、音信不通。これでは、かえって人間不信を招き、さらに、被災者の心を傷つけている事実も理解していただきたいのです。

人は一人では生きていけません。社会には「光と影」が存在します。大きな「影」は、大きな社会問題が地域に存在していることを意味しています。「光」は素晴らしさです。光と影は、常にセットになっています。光で頑張れば、必ず影が発生します。不信感や疑念を払拭するのは光です。光とは愛であり、思いやりの気持ちです。弱者への何気ない「心づかい」なんです。

この間、私に「あの子とあの子は生きているの?」というメールが被災者から来ました。私が被災地でのボランティア活動に連れていった学生のことです。その学生2人に電話をしました。2人は社会人になりましたが、「メールを送っても返ってこないという話だが、何で彼女たちにメールを送ってやらないんですか」と聞きました。日々の仕事が忙しく、メールを送れない事情も理解できます。しかし、メールを何回送っても、返事ひとつ来ないことに対して、小学校の時から付き合っていた彼女たちはショックを受けています。どうして、そんなことで被災地の子どもを傷つけるのでしょうか。心づかいが大切なのですが、持続の難しさを実証しています。

人は、一人です。そういう人たちと被災地のことでお付き合いをするなら、長く支援しなさいと言っています。メールを送ることが何時間かかるのですか?「今日は富士山がよく見える」と一つメールを送ってやったらどうですか。「晴れ晴れして凄くいい気持ちで頑張ってるよ…何々」

とか、何かのマークつけて送ることに何秒かかるんですか。そういうことができないっていう人は、私は人としては信用できません。

社会の中で立派に成功することも大事なことです。大学においては、色んな人たちと付き合いあって、人と人が付き合うことが、どんなに実践的な学習になるかを知ってほしいんです。しっかりと人の話を聞き、しっかりと答える。喋って聞くことが、会話・コミュニケーションです。聞く力のほうが大事です。

そういう点でいうと、メッセージを出している子どものメールに返事ができないでいる学生たちを、私は心配しています。彼らには、現在、仕事上で苦しく、辛いことが起こっているのか、心づかいのことは怒っていますが、逆に、彼らの現状が心配です。仕事が大変で精神的に追い詰められていないか心配しています。

たった一言の、ひとつの行為の中に、氷山の一角ではないですが、人としての様（さま）、様子、状況、心根、心理状況が垣間見えるものです。社会的なインパクトを受けた弱者に対して、しっかりと思いやりの目線を配り、優しく接すること。一言のメッセージを送り、仕事で忙しい中ですが、心の中で今まで関わった人たちのことを心配し、思いやる、そういう優しさを、是非とも、人間的な意味合いからも身につけていただきたいと思います。

もしも、都留文科大学に来たからといって、その資質や知識が学べるかどうかは確約できません。しかし、そのような人間的な価値観・道徳心・心根・心づかいを身につけられるチャンスは多いと思います。

今後とも、皆さんの懸命で一途な取り組み・勉学を期待し、都留文科大学でお会いすることを切望しています。

(都留文科大学教授 NPO法人グラウンドワーク三島専務理事 渡辺豊博 文責)